

関東大震災 100 年賀川豊彦の震災復興事業から考える

多様につながり合う社会をめざして

賀川豊彦から受け継ぐ、連帯、互助、協同の結び直しへ向けて

趣意書

2023 年は、賀川豊彦が関東大震災の被災地支援を行ってから 100 年を迎える。当時賀川は被害が極めて深刻であった本所地区に拠点を構えて、甚大な困難に陥った被災者と被災地における一刻を争う救援に始まり、これらの人びとや地域の生活再建への支援、コミュニティ全体にわたる回復、そして復興へと、息の長い活動を段階的に進めていった。賀川はその際、神戸のスラムで培った経験からの学びをいかんなく発揮する。近代化を象徴する輝く神戸港町の影で生み出されたスラムという構造的貧困の存在を広く社会に訴えたこの若き神学生は牧師となり、仲間たちと共に、神の愛に基づく隣人愛によって苦しみを抱える人びとひとりひとりに寄り添いつつ、様々な社会事業を展開していった。これと同じく、東京では、震災による家屋や街、そして暮らしの焼失という危機的状況に対して、仲間と共に、協同組合保育、消費組合、信用組合、医療組合などを立ち上げて、地域の復興、さらには持続的な組織による新たな社会機能の創出へと連帯、互助、協同の組織化を強力に推し進めた。その後のわが国は暗い時代に突入する。震災に続く未曾有の人災としての戦争。賀川は、終戦直後から戦争のない社会の建設を目指し、世界連邦運動をはじめとした平和運動を牽引するとともに、(日本生協連の前身となる)日本協同組合同盟の立ち上げ、協同組合による共済事業の確立や労働者福祉運動の推進など、新しい連帯づくりにその生涯を賭したのである。

現在、世界は新型コロナウイルス感染症の蔓延、世界的経済の停滞、気候変動、そしてロシアによるウクライナ侵攻という深刻な地球規模の危機的状況を迎えている。これは、かつて賀川とその仲間たちが直面した時代のものとは、規模も質も大幅に異なるものであろう。しかし、この危機的状況だからこそ、かつて賀川と仲間たちが果敢に挑んだように、市民同志あるいは組織同志がつながりあい、同じ目標に向けて行動を共にすることが求められている。賀川豊彦と仲間たちから改めて学び、それを新たな実践に結びつけたい。そのための契機として、本事業を行うものとする。賀川が神戸や本所で仲間と共に紡いだ糸でさらに多くの人たちと結んだ繋がりはその後多くの組織と活動へと結実した。今新たな諸問題に直面して、我々はこの糸を結び直し、さらに大きく多様なつながりでこの困難に立ち向かう必要がある。多くの方々にご賛同とご参加を願う次第である。

「関東大震災 100 年事業 賀川豊彦とボランティア」実行委員会